

フィンランドが教えてくれた大切なこと

—私を変えてくれた北欧の国—

The Important Things Finland Told Me:

The Nordic Country, Which Made Me Who I Am

お茶の水女子大学生活科学部 青木 優

AOKI Yu

(Ochanomizu University)

キーワード：フィンランド、女性活躍

はじめに

私は都心にある中高一貫の私立校に通い、それから大学に至るまで9年間、毎朝1時間強満員電車で揺られる生活をして育ってきた一人の女子学生である。昔から勉強が好きで、部活にも手を抜かず、イベントごとではまとめ役。いつも忙しく走り回り、友達にはキャリアウーマンになりそうだと数え切れないほど言われてきたような人間だ。将来は自分のキャリアを切り開いてバリバリと活躍していきたいと公言するくらいの気の強い学生だった。

本稿は、そんな私が大学に入学してから、現代社会の問題に気づき、お母さんに優しい国と言われる北欧の国フィンランドへの留学を決意し、5ヵ月後人間として大切なことに気づいて帰国するまでのお話である。

女子大生のホンネと現代社会への疑問

大学入学当初、将来第一線で働くことには興味はあったが、結婚や子育てにはほとんど興味がなかった。社会全体のイメージから、最前線で活躍しかつ子供も育てるというのは不可能だと決めつけていたためだと思う。周りの優秀で意欲的な女子学生たちの中にも、仕事で活躍することと結婚子育てをすることの両立を考えると、かなり不安がある人がたくさんいるようだった。高等教育を受けてきた学生が、自分の能力を活かして仕事をしたいと思うのは素晴らしいこと。結婚して子供を育てたいと思うこともとても素敵なこと。どちらも私たちの人生に自然にあるべきものなのに、どちらも実現させる未来を簡単に描くことができない。本当は不安なんてなく、どんな人も、自由な選択ができる

世の中であればいいのに。大学入学以降、そんな風に考えることが増えていった。

フィンランドとの出会い

フィンランドと聞いて皆さんは何を思い浮かべるだろうか。サンタクロース、ムーミン、北欧雑貨、かもめ食堂など、日本人になじみの深い特徴も多くあるが、実は、男女平等国家ランキング世界第2位(世界経済フォーラム/2013)、お母さんに優しい国ランキング世界第1位(Save the Children/2014)、女性が住みやすい国ランキング世界第5位(Newsweek/2011)など、女性を取り巻く環境を評価する数々の指標で上位にランクインしている国家として世界的にも有名な国である。

そんな素敵なフィンランドという国と私の出会いは、運命的なものであったと言っても良いだろう。留学そのものへの憧れは高校生の頃から持っており、大学生になったら絶対に海外の大学で勉強を試みたいと考えていた私は、大学入学以降、本格的に留学準備を進めるため、どんな国に留学できるのか情報収集をしていた。そんなある日、ある留学フェアでたまたまふと目に入ったのが「男女平等国家 フィンランド」というキャッチコピーのフィンランド紹介パンフレットであった。見た瞬間にピンときて、家に帰るなりすぐフィンランドについてネットを貪るように調べた。恥ずかしながら私はこの時までフィンランドが社会福祉国家として有名であることさえ知らなかったのであるが、前述したようなフィンランドが持つ数々のランキングと、男女平等という基本的価値観という特徴にあったという間に惚れ込んだ。仕事と子育てを両立しにくいと言われる日本の社会、女子学生の不安、大学入学以降違和感を抱いてきたこと。それを解決させるヒントをフィンランドで見つけることができるのではないか。男女平等国家や女性が住みやすい国と言われるその国では、日本の女子大生が抱いているのと同じような不安はあるのか、フィンランドの学生たちはどのようにして自分の将来を考えているのか。知りたいという感情がどんどん大きくなった。そうして間もなく私は7,900キロ離れた北欧の国フィンランドへの留学を決意したのだった。

始まった留学生活

お茶の水女子大学の交換留学協定校にはフィンランドの大学が二つあったが、私は現地で行う調査活動の環境条件を東京都内に通う学生とできるだけ近くしたいと考え、都市部にあるタンペレ大学への申請を決心した。幸いなことに、タンペレ大学は社会科学系学問の歴史が古く、質の高い授業が開講されていたため、自分の学ぶ環境としてはぴったりであった。加えて、奨学金を取得するためトビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムという留学支援プログラムへの応募も決心。金銭面で手厚いサポートのみならず、志の高いユニークな学生たちが日本全国から集まり、それぞれが世界へ飛び立って活躍したのちにまた日本で集まれるというネットワークに大きな魅力を感じ、ぜひとも一員になりたいという熱意を持って選考に臨んだ末、合格。強力なサポートを得てフィンランド留学の準備が

整った。

交換留学申請がタンペレ大学側からも正式に受理されると、私は秋学期開始に先立ちタンペレ大学で開講されるサマースクールに参加するため一足早くフィンランドでの生活を開始した。8月のフィンランドはまだ日がとても長く、21時でもまだ真昼のような明るさだったのを覚えている。生活を始めてすぐに驚かされたのは、平日16時以降になると子供を連れて一家揃って公園に遊びに来る家族や、街中そこかしこに見かけるベビーカーを押すお父さんの姿であった。日本では見たことのないあり方を次から次へと発見するたびに、本当に男女平等国家に来たのだという実感に興奮を止められなかった。

フィンランドでの生活は、東京にいたころとは全く違い、木々に囲まれてのんびりとしたものだった。朝はシリアルや果物で簡単に済ませ、バスに乗って登校。週に3コマと少なめの授業ではあったが、どれも予習復習に時間のかかるものだったので、授業の無い日もだいたい学校へ行きお気に入りの図書館で文献を読み、夕方頃に帰宅するという生活だった。昼食は決まって学食だったが、サラダ、パン、メインディッシュがワンプレート2.60ユーロと、物価の高いフィンランドでは良心的な価格でお腹いっぱい食べることができた。9月ごろまではまだ日も長くポカポカとしていたので、湖のそばで寝転んで日向ぼっこをしたり、10月以降は急に思い立って友達と近くのサウナに行き、夜は一緒に料理をして映画を見たりなど、フィンランドらしい生活もゆったりと満喫できた。



(写真) 夏の平日夕方、お父さんお母さんが揃って子供を連れて遊びに来ている家族

フィンランドがたどってきた道のりを知って

秋学期のFirst Periodで私が受講した授業の一つがFinnish Social Welfare and Social Scienceというもので、この授業ではフィンランドの社会福祉システムとその歴史について座学で学びフィンランド人学生とインターナショナルの学生が同じ場所で意見交換をし合う他、地域の保育所や障害者施設、労働者支援センターやガールズハウス・男性のための市民ハウスという憩いの場などへの見学も行った。

フィンランドにはKelaというソーシャルサービスがある。この機関が子育てや家族の支援、失業や病気のサポート、学生への援助など、この国で生きる上でのサービス全般を行っており、このシステムに対する国民の安心感は大きい。出産後の育児休業とその期間中の給料サポートも充実していて、育休後の復帰も難題ではない。女性が自分の専門知識を活かした仕事を続けることはいたって普通のこと、子供を持つ母親でもそのほとんどがフルタイムジョブに就いて働いている。フィンランドがここまで成長してきたその過程には何があったのか、それを知ることによって日本に還元できないか、そう考え、私は授業に出席し、文献を読み漁り、フィンランド人に話を聞き、友人の力も借りて、その歴史的背景を少しずつ読み解いていった。12世紀から700年以上続いた被統治時代、その中で疼いてきた地位向上を目指す女性らの気持ちと20世紀初期にはじまった社会運動。初めから男女平等だったわけではない、他の国々と同じように、権利を虐げられた人々が声をあげて行動を起こしてきたという歴史。だがその中でもフィンランド史の特徴とも言える、フェミニズム運動の主張と国家政治の融合、経済的にも国が苦しい時期に政府が理念として打ち立てた、「人は財産」「平等」という柔軟で尊敬に値する価値観。今のフィンランドが社会福祉国家となった背景にはこのような歴史があると学び、さらにその動きはここ50年で急激に変化してきたものなのだと知った。

それならば、今の日本も徐々に良い方向に向かっている変化の時なのではないか。これほどまでに女性の活躍・働き方、子育て支援などが話題になり、試行錯誤しながらも政府も企業も考え取り組みをしている状況。この状況にもっと多くの人々が当事者意識を持って興味を示し、そこから目をそらさないこと、諦めないこと。変化は数年で簡単には訪れてはくれない。自分の今の状況だけを嘆き人を批判するのではなく、長い目で見て、広い視野で考えて、未来をよくしていこうとひとりひとりが熱心になり、生産的な声を上げていくこと。それが今私たち日本人にも求められているのではないかと思うようになった。

現地調査での気づきと次への一歩

大学での授業に加え、私はさらに働くこと・家族を持つことに対するフィンランド人のリアルな考え、意識面での日本人との違いに迫るために、フィンランド人女子学生への対話型インタビューを一ヵ月で4人に対して実施した。

出発前に同様の調査を日本人女子学生に対して行った際、最も多かった回答が、「子供ができた後仕事を続けるかはわからない又はやめると思う」という意見だったのに対し、フィンランドの学生は「将来結婚して子供を育てたい、そしてそれと両立させて働き続ける自分の姿をイメージできる」と全員が回答する結果となった。このような大きな差が出た理由として、フィンランド人が自国の充実した社会制度と、16~17時には退社できる一般的労働時間への安心感を持っているというだけでなく、どのような企業で働こうとも、同僚や上司など会社内の理解はあると思うという職場の雰囲気への不安の無さが回答者全員に見受けられた。育休の取得は国によって保障されているし、それは誰でもお互い様のことだから理解されるのが普通ではないかという意見であった。それを聞いた時、日本で職場然り電車内然り公園然り、周囲の人に理解してもらえない、窮屈な思いをするというような子連れ家庭を苦しめる精神面の負担を思い出した。考えてみればフィンランドに来てから、街の中心部でもバスでもカフェでもいろいろなところでベビーカーを連れた家族を見る機会があったが、誰一人として迷惑そうにしていなかったなと思い、なぜこの国ではそのように思いやりがあり、お互い様だと寛大な心で受け止められるのかが気になってきた。そこで私はこの点に焦点を移し、フィンランドの社会の中で、お互いを「尊重」する雰囲気がどのように作られ、守られているのかについて答えを探ることにした。

初等教育の学校行事に見出したヒント

「尊重」が作られる重要な鍵として私は初等教育に目をつけた。きっかけは、日本の初等教育に欠かせない全員参加の行事について考えていた時のことだった。私は小さい頃から運動会などの学校行事が大好きで、練習にも意欲的な生徒であったが、当然そういうものが好きではない子もいた。しかし学校ではいつでも、行事に積極的な学生が皆の手本となり、先生からも信頼されていたように思う。そういう慣習の中で何年も学校生活を送っていると、皆と同じ行動を取れない人は「異端」「和を乱す」と捉えられるようになる。そうして育ってきた人々が大人になり社会に出た時、会社で誰かが育休を取る、時短勤務をする、子供が病気で早帰りするという選択をしようとした時、それは和を乱す行為である、自分だけそうするのは迷惑であるという考え方が生まれてしまうのは、ある意味仕方のないことなのではないか。フィンランドを初めヨーロッパの多くの国では、学校行事というものが存在しないか、または全員強制参加ではなく、やりたい人がやり、やりたくない人はやらなくて良いという緩いくくりのことが多い。このような、子どものうちの十数年間の慣習の違いは、人々の考え方や感覚の差を少なからず生み出すだろう。私は全員参加の行事が悪いと言っているわけではもちろんないが、このような幼少期からの小さな「当たり前」が大人の社会の固く壊せない「雰囲気」になってしまっているのではないかと考えた時、人間の中身の基礎が出来上がる初等教育のやり方に関心が湧き、勉強してみることに決めた。

私が見たフィンランドの教育

フィンランドは2000年以降、OECDが実施するPISA（国際学習到達度調査）の成績において常に上位に位置しており、教育制度は世界的にも有名で、それを学びにフィンランドへやってくる人も多いのだが、私はそんなわけでフィンランドでの留学を開始して4ヵ月目にようやく教育の勉強の入り口にたどり着いた。Second PeriodでFinnish early childhood education and comprehensive school systemという授業を受講し、フィンランドで実施されている教育について概要を一通り学びながら、文献も集めて読み、preschoolの見学も実施、留学の終わりまで1ヵ月半の間ひたすら教育のことだけを考え、日本とフィンランドを比較していった。そしてその結果自分なりにたどり着いたフィンランドの教育の注目すべきポイント、それが「将来を見据えた一貫したLife-long Learning」と「個々の違いを認めぬばす Individual/Special Education」の大きく二つであった。つまり、早い段階から将来働いて生きることを見据え、小学校から中学校、中学校から高校、高校から大学、そして大学から社会というそれぞれの間の移行もスムーズに行われることにより、長い時間をかけ考え学習してきた末に就いた自分の仕事に高い誇りを持てること。そして、クラスの中で違う進歩で進んでいく、生徒それぞれにあった教育のやり方によって、この違いを自然に認め、尊重できるようになること。これが、私が考えるフィンランドの教育の特筆すべき点だ。そしてそれは間違いなく、現代のフィンランド社会において、人々がそれぞれの選択を尊重しながら、各人・各家庭が働いたり子育てしたりできていることの一つの要因であろうという結論に至った。

おわりに

フィンランドという国は、日本とほぼ変わらない大きさの国土の中に、500万人が住んでいる、ゆったりとしたところだ。無数の湖と白樺の木々、季節ごとに大きく変わっていく日の長さや街の色。星が日本で見るとより何倍も大きく、思わず手を伸ばしたくなるような広い空。そこに流れる豊かな時間に5ヵ月間身を置いて気づいたことは、フィンランド人の、違いを認め尊重し合う寛大な心と、子どもを社会全体で大事にする暖かさだった。いい制度があるからだけではない、それを作り、守り、人を何よりも支えているのは周囲の心。フィンランドでの生活は、都会の人混みで毎日せかせかと生活していた私に、自然とこの大切なことを気づかせてくれた。日本をそれぞれ誰もが不安なく将来の選択ができる世の中にするためには、フィンランドが実現している社会福祉制度を一つずつ真似ていくよりもまず、この国の人々の心を、愛を、見習うべきではないかと思う。



(写真) 紅葉をバックに写真を撮る一家